特別支援教育と作業療法
協働の糸口を探る

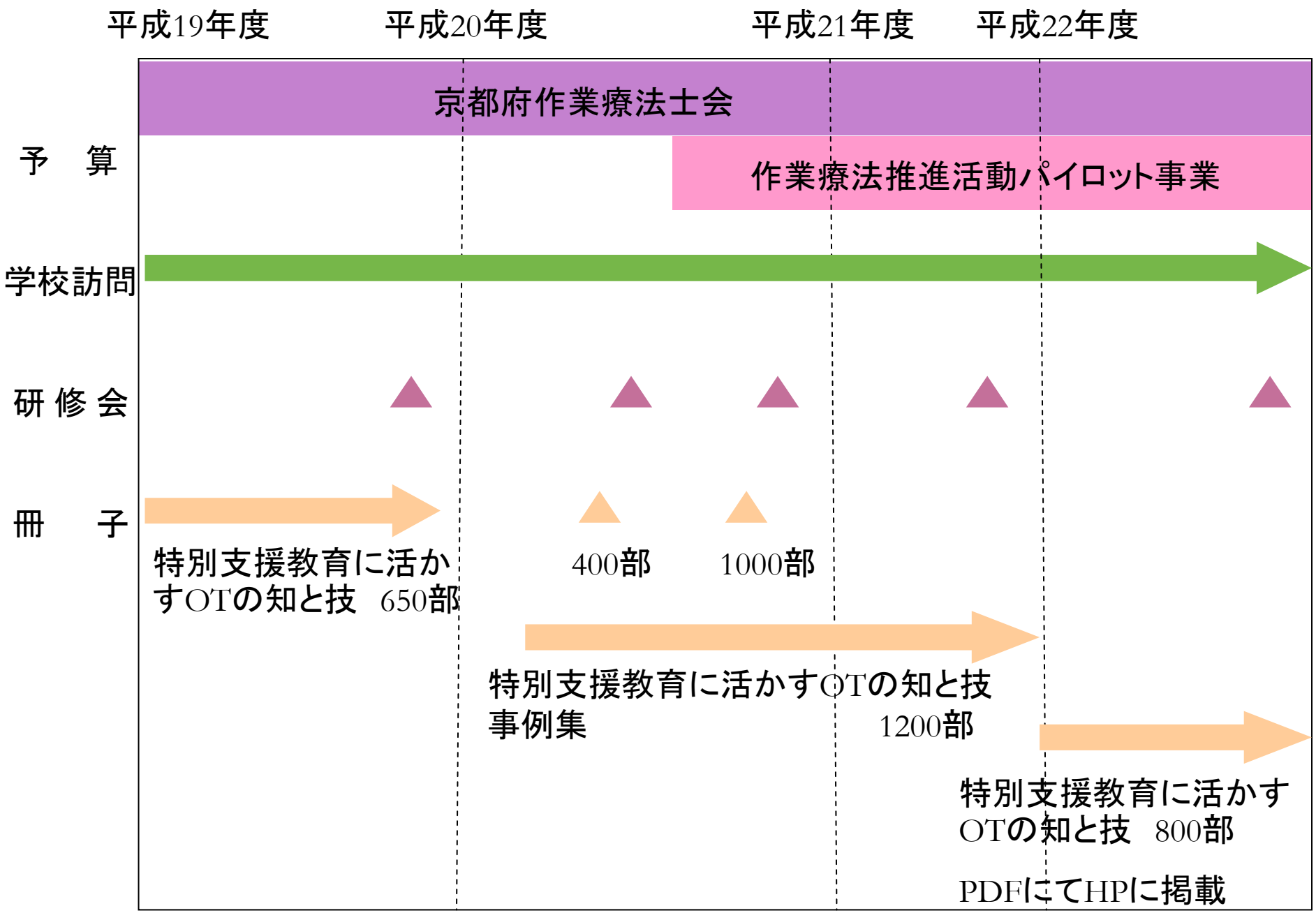
京都府作業療法士会
特別支援教育OTチーム委員

平成19年度　京都府作業療法士会
特別支援教育ＯＴチーム設立目的

- 学校と個人の連携からシステムの連携へ
- 作業療法の啓発と地域貢献
- 学校での子どもたちの姿を作業療法士が知る
  - 医療・福祉現場での支援内容の充実
  - 学校という集団・学びの場での具体的支援
- 作業療法士の卒後教育

↓

子どもの生活の場である学校が
すべての子どもたちにとって有意義な場となるよう


平成19年度
平成20年度
平成21年度
平成22年度
京都府作業療法士会
予　算
作業療法推進活動パイロット事業
学校訪問
研 修 会
冊　　子
特別支援教育に活かすOTの知と技　650部
400部
1000部
特別支援教育に活かすOTの知と技
事例集
1200部
特別支援教育に活かすOTの知と技　800部
PDFにてHPに掲載

平成19年～22年までの実績

- 学校訪問数　約300件
- 講演会　5回（約600名の参加者）
- 冊子発行

  特別支援教育に活かすOTの知と技（初版）　2000部

  OTが出会った子どもたち　800部

  特別支援教育に活かすOTの知と技（2版）
- OT学会発表　4回

平成23年度
京都府士会作業療法推進パイロット事業

- 学校訪問
- 研修会
- 冊子と訪問に関するアンケート・インタビュー調査

OTチームの実践を振り返り、作業療法のどのような視点が有効であったのか、現状における課題は何であるのかを学校教育現場の生の声を聞くことで、学校教育現場に必要とされる作業療法の役割、協働の方法を検証し、特別支援教育と作業療法のあり方を考える一つの資料とすることを目的とする

アンケート調査

- 京都府下の公立全小中学校、特別支援学校、支援センター　全621校の特別支援教育コーディネータを対象
- 冊子アンケートと訪問アンケートの2種を郵送発送し、郵送にて回収

インタビュー調査

- 過去に学校訪問を行った9校を対象
- 半構造化面接による個人インタビューを実施、インタビュー者は対象となる学校を訪問していない者

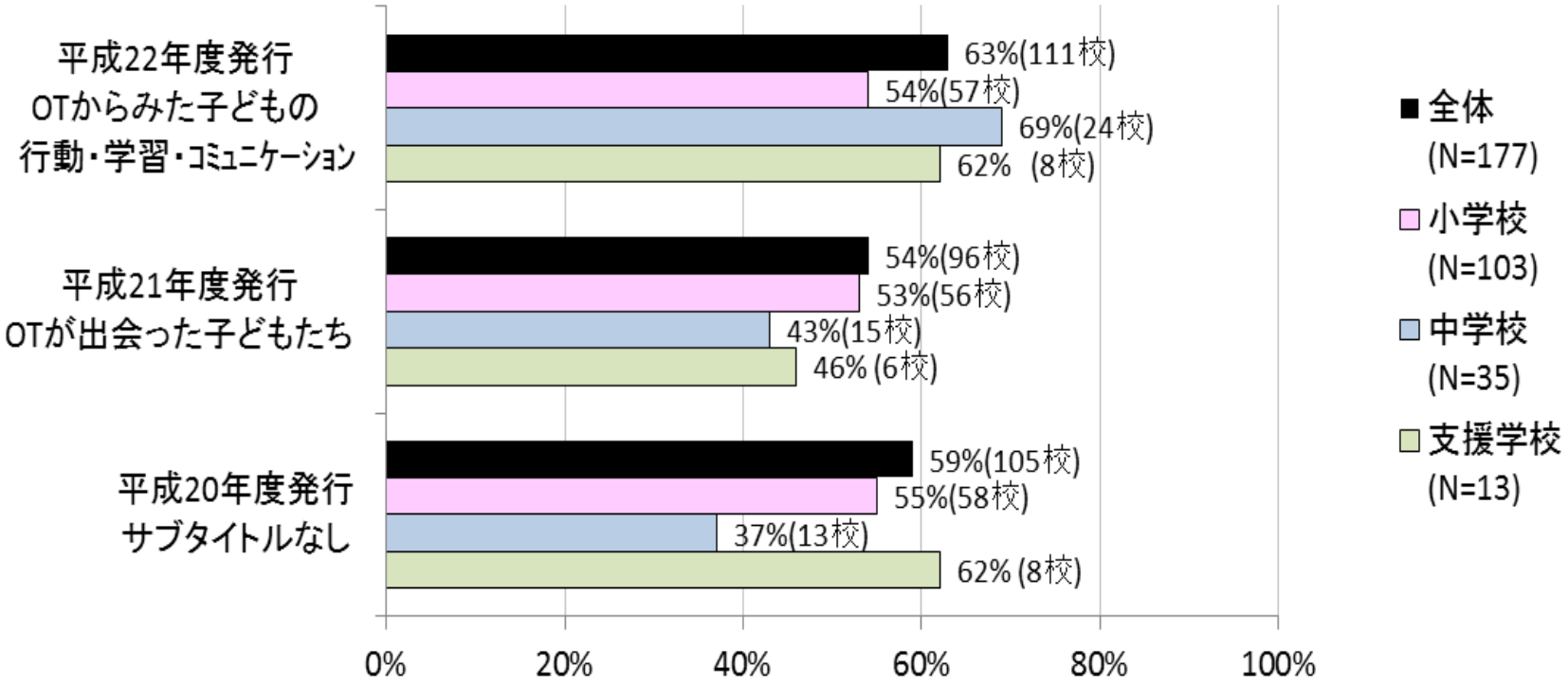
- 冊子認知度、訪問利用度
- 冊子と訪問の有用性
- 教員からみた作業療法ができること
- 学校訪問の形態についての要望

アンケート回収率

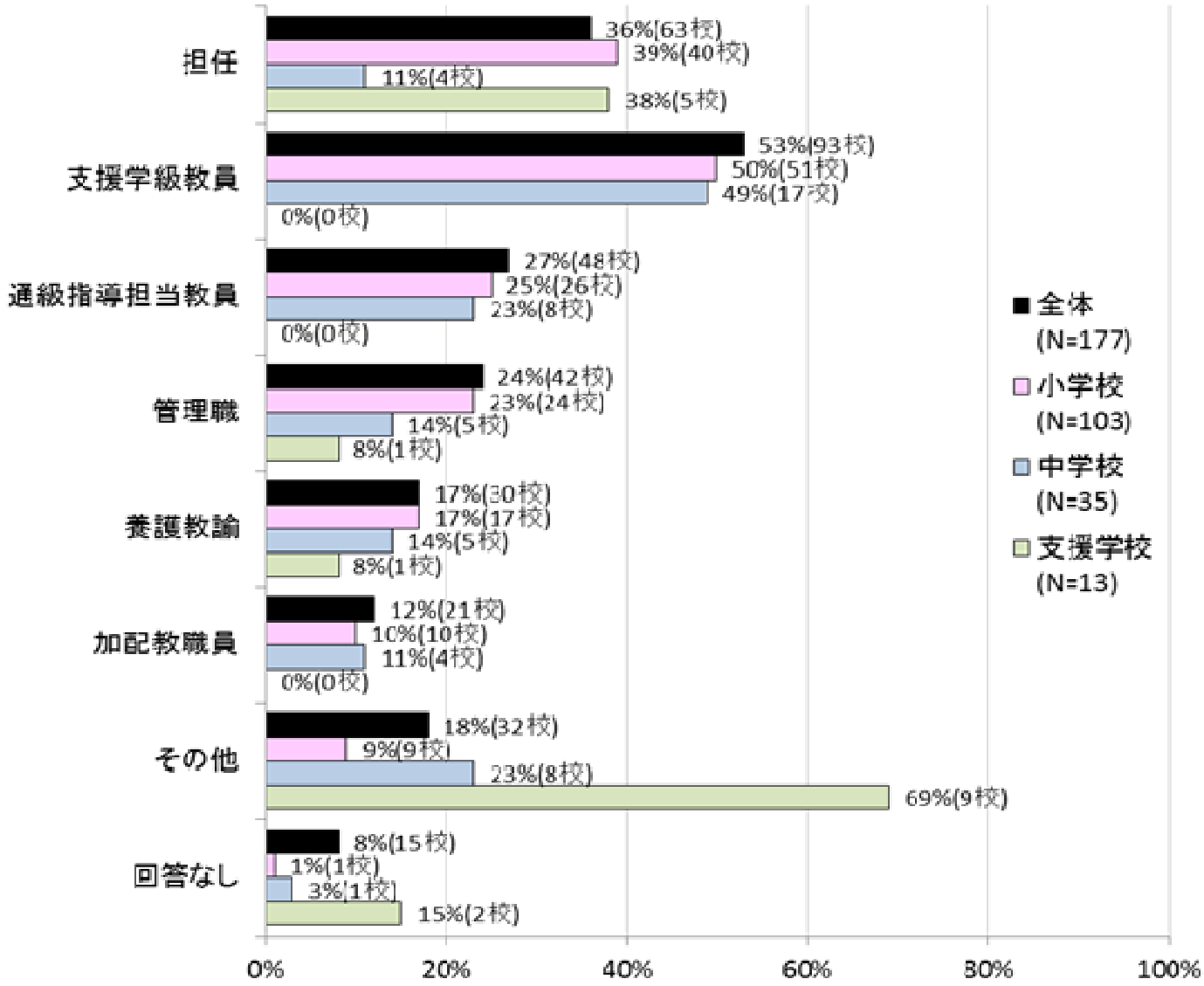
	冊　子	訪　問
全　　体	28.5％（177/621校）	26.6％（165/621校）
学校名記載校	24.3％（151/621校）	22.9％（142/621校）
小 学 校	24.7％（103/417校）	24.1％（101/419校）
中 学 校	20.3％（ 35/172校）	17.2％（ 30/174校）
特別支援学校・その他	40.6％（ 13/ 32校）	34.3％（ 11/ 32校）

冊子の認知度

冊子を見たことがあると回答した割合



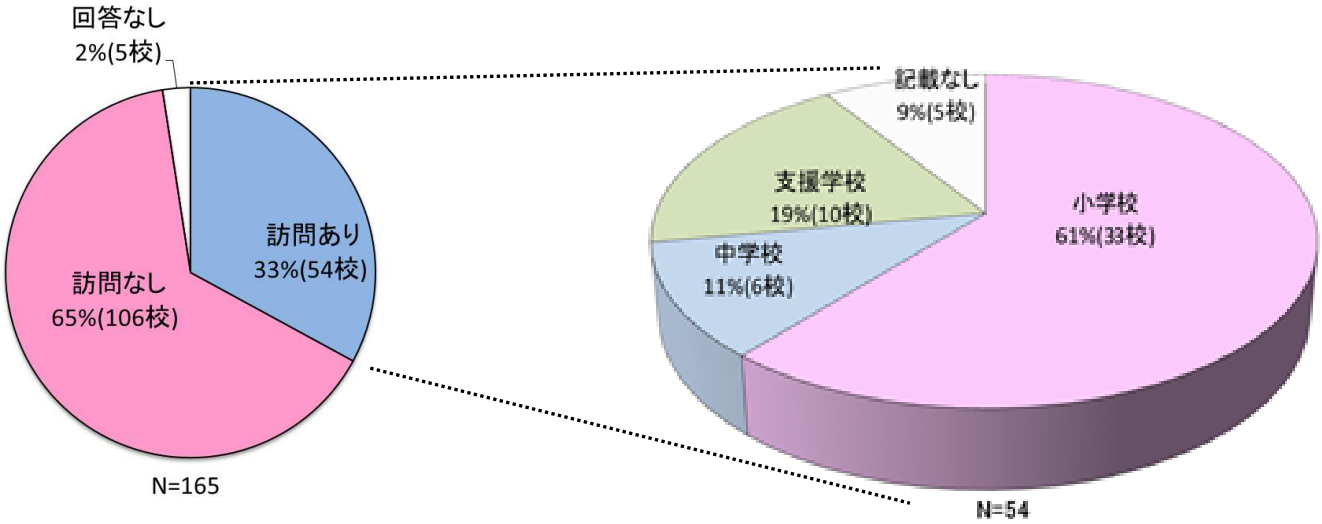
冊子を読んだ教職員の立場

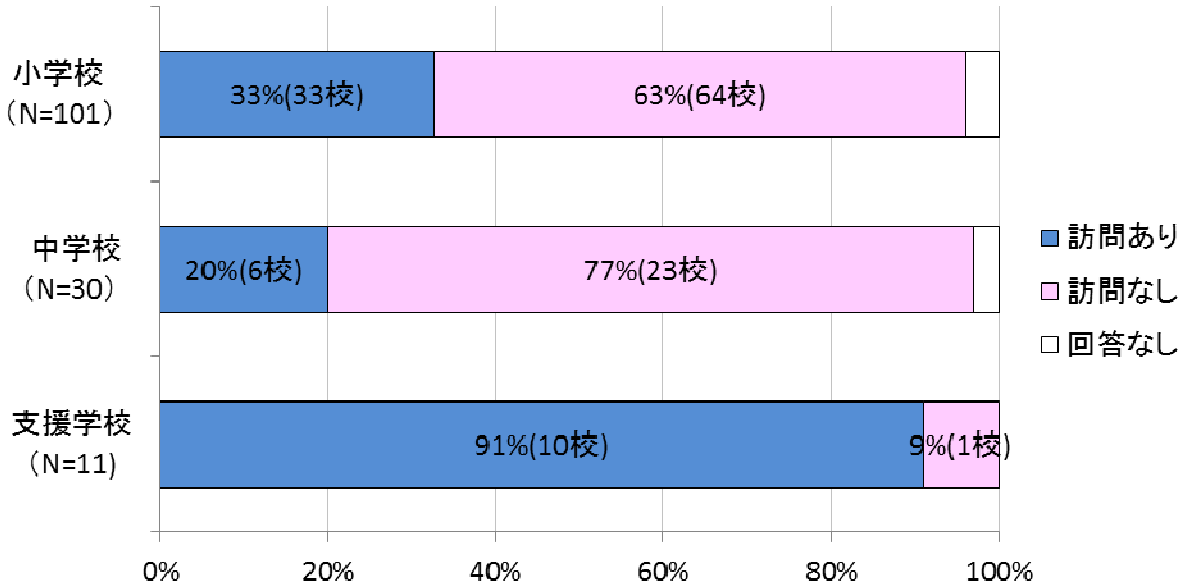


インタビューから（冊子について）

- 感心する所が多くあった。冊子を見て試す事ができ、参考にできる。また、保護者への説明の際に、参考にする事ができると感じている。
- 具体的に書いてあるので、担任の先生に渡してみてもらったりしている。『この子にあてはまるんちゃう？』とか。
- 教師の視点と違う視点なのでとても参考になる。視野を広げるという意味では目からウロコだった。
- （冊子と訪問を比べると）実際の子どもの様子を見てもらって話を聞けるので、訪問で来てもらうのが１番いい。へんぴなとこなので、タダで来てもらうのが気が引けてなかなか頼みにくいけど。
- OTチームの冊子からもOTがどう考えているか理解につながる。学校では冊子をコピーして配っています。
- 冊子よりも、実際の子どもの様子を見てもらう方が絶対に良い。
- Q&Aはわかりやすかった。わかりにくい言葉の説明を具体的に書いてあるので良い。訪問で直接関わってもらって分析してもらうと助かる。

OTによる訪問の有無


回答なし
2%(5校)
訪問あり
33%(54校)
訪問なし
65%(106校)
N=165
記載なし
9%(5校)
支援学校
19%(10校)
中学校
11%(6校)
小学校
61%(33校)
N=54

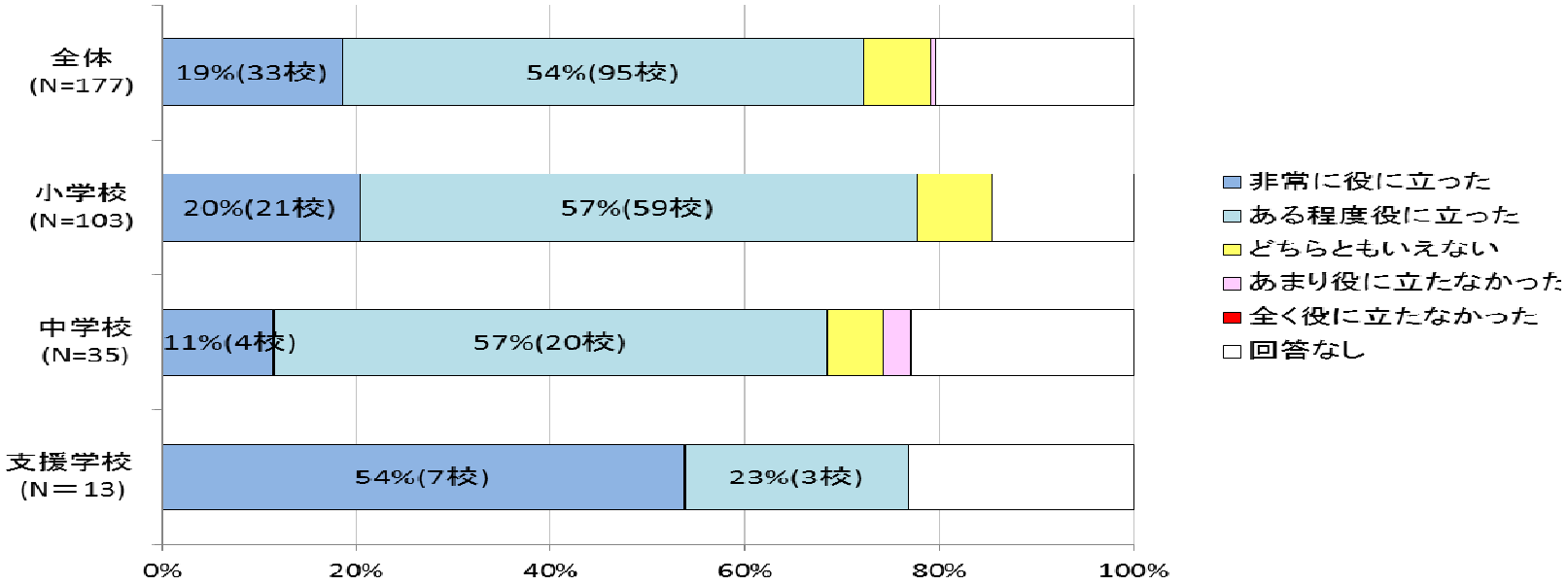

小学校
（N=101）
33%(33校)
63%(64校)
中学校
（N=30）
20%(6校)
77%(23校)
支援学校
（N=11）
91%(10校)
9%(1校)
0%
20%
40%
60%
80%
100%
訪問あり
訪問なし
回答なし

インタビューから（訪問依頼した経緯は？）

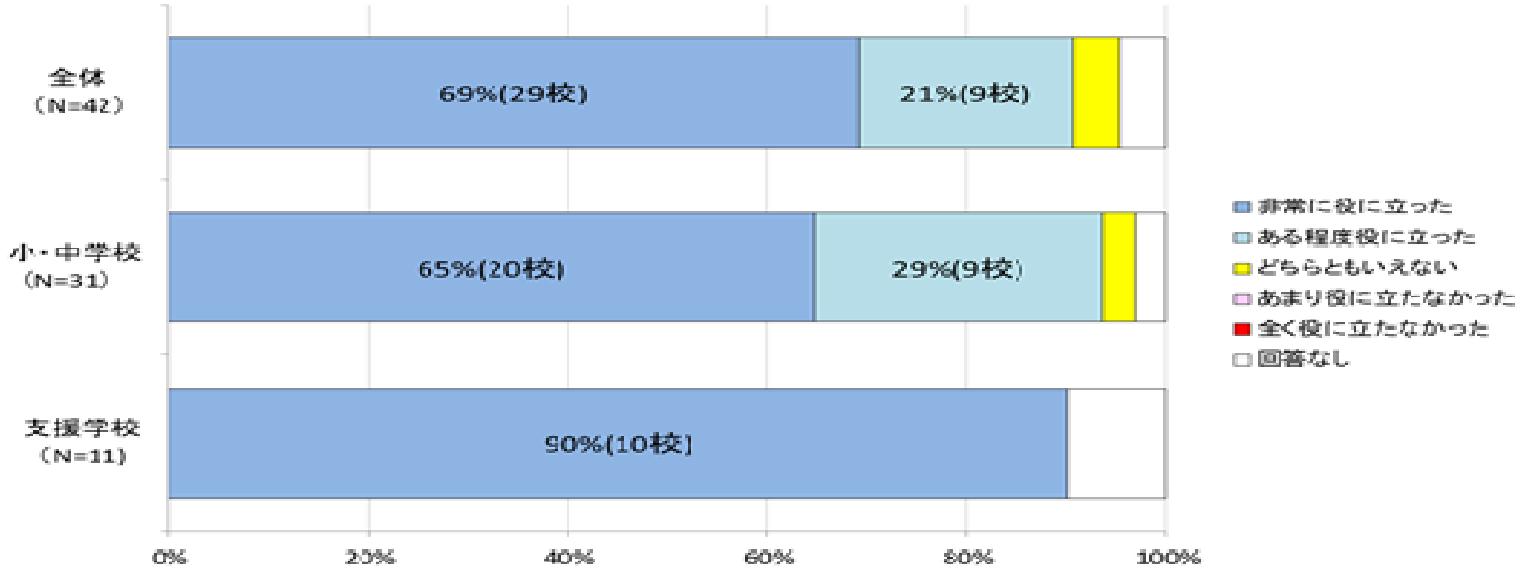
- 研修会でOTの〇〇先生に会い、OTが現場の子どもたちにも関わる職種だと知った。OTチームの活動が始まり、学校に来てもらいやすくなったこと（無料）を知り、依頼した。
- 支援学級の担任がどのような教育を進めて良いか、迷いがあった。研修会でOTチームの存在を知って、依頼してみようと思った。
- OTチームの研修会で、OTが京都の子どもに定期的に関わっていることを聞いた。OTが現場の子どもたちのことを知っている職種だと知って依頼した。
- よくわからなかったから、とにかく無料だしお願いしようと思った。
- 子どもたちに情緒の問題とかだけでなく、感覚の問題があるって初めて聞いて興味を持った。あの子の場合はどうなんだろうとか関心がわいた。
- 特別支援フォーラムに参加した際、OTの〇〇先生とお話しする機会があった。本校の教師に特別支援の視点がなかなか定着しておらず、知ってもらいたいということで職員研修をお願いできないか依頼した。
- 冊子で知っていた。OTチームから校内研修会に来てもらった。その時に具体的なアドバイスをもらった。校内から事例を挙げ、事例を通して行った。目からウロコだった。OTの〇〇先生とのつながりもあり訪問依頼をした。

冊子と訪問の有用性（全体）

冊 子

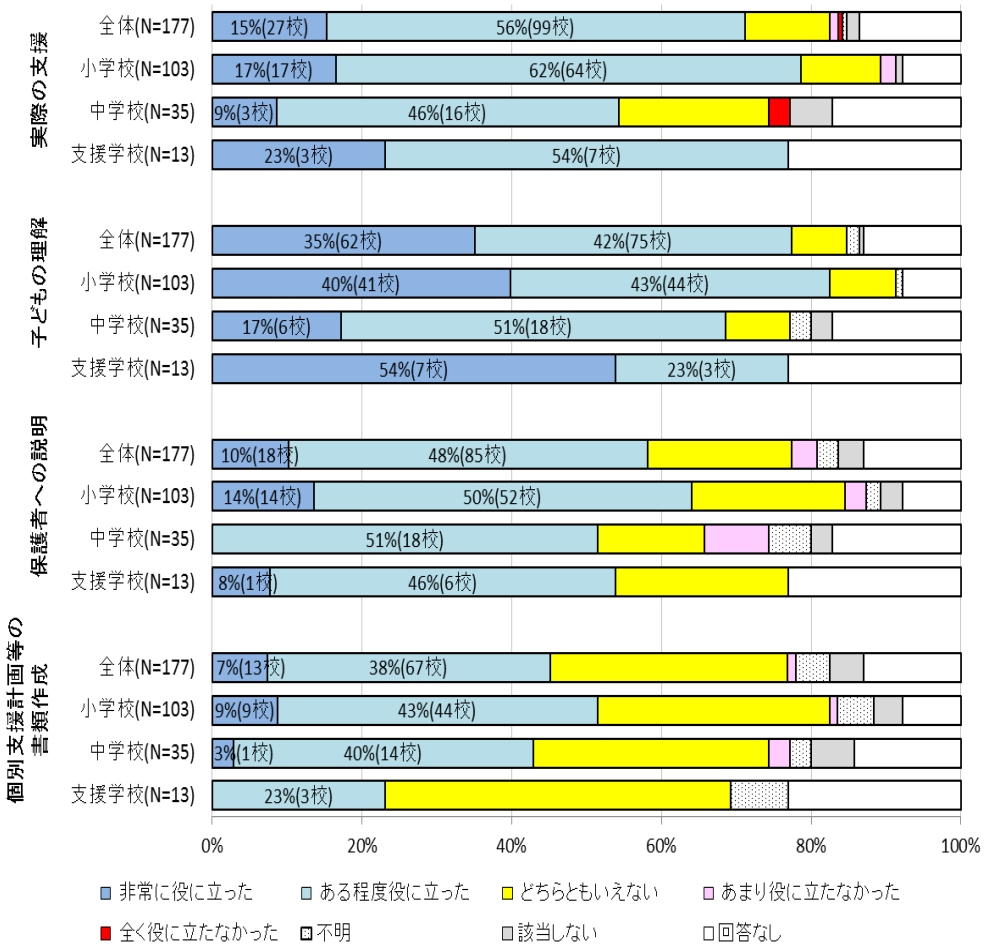


訪 問

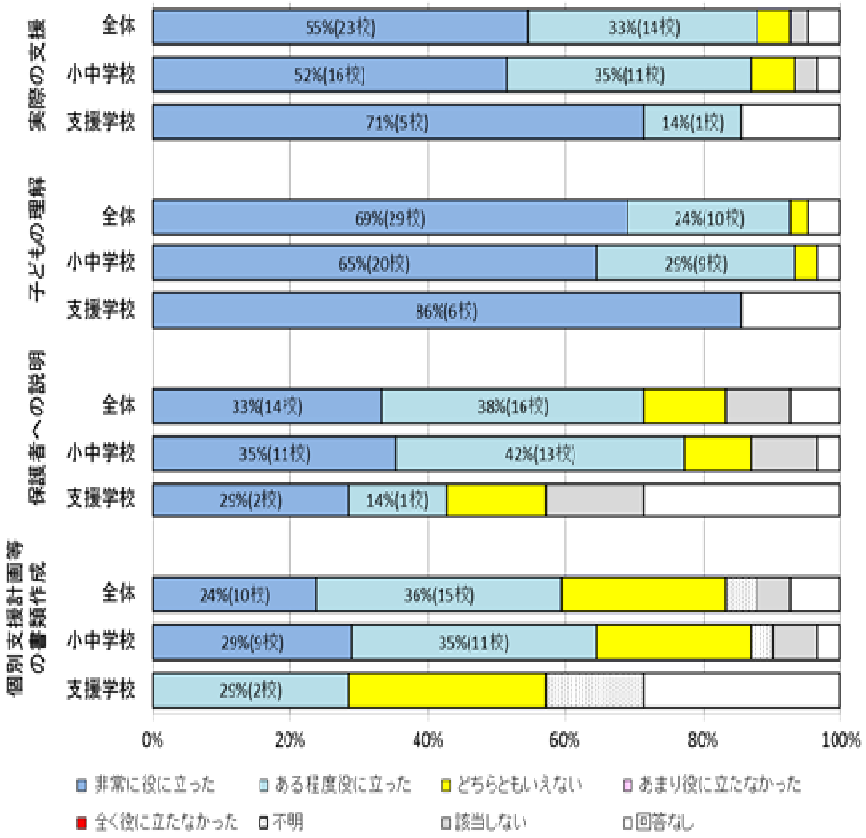


冊子・訪問が何に役立ったか？

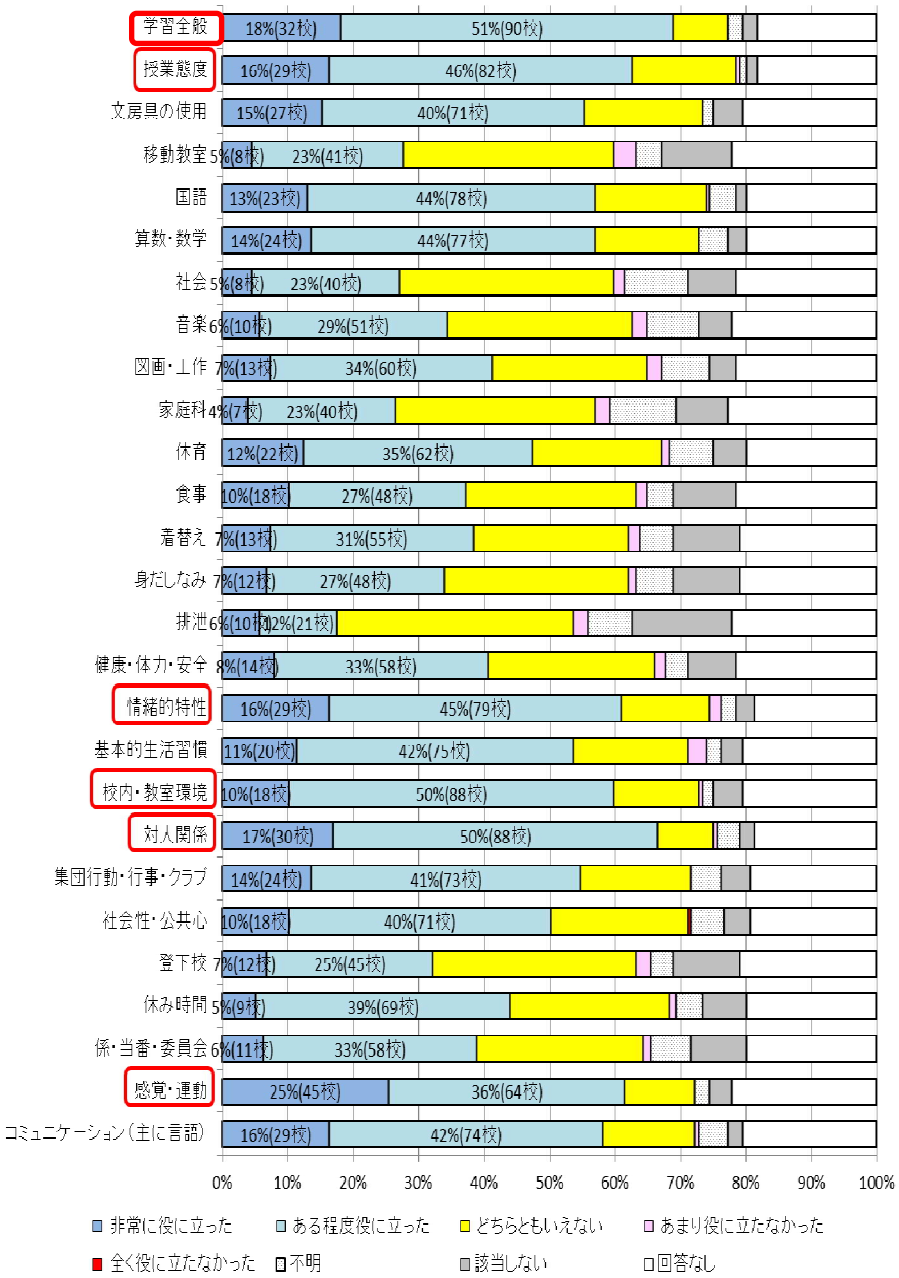
冊　子



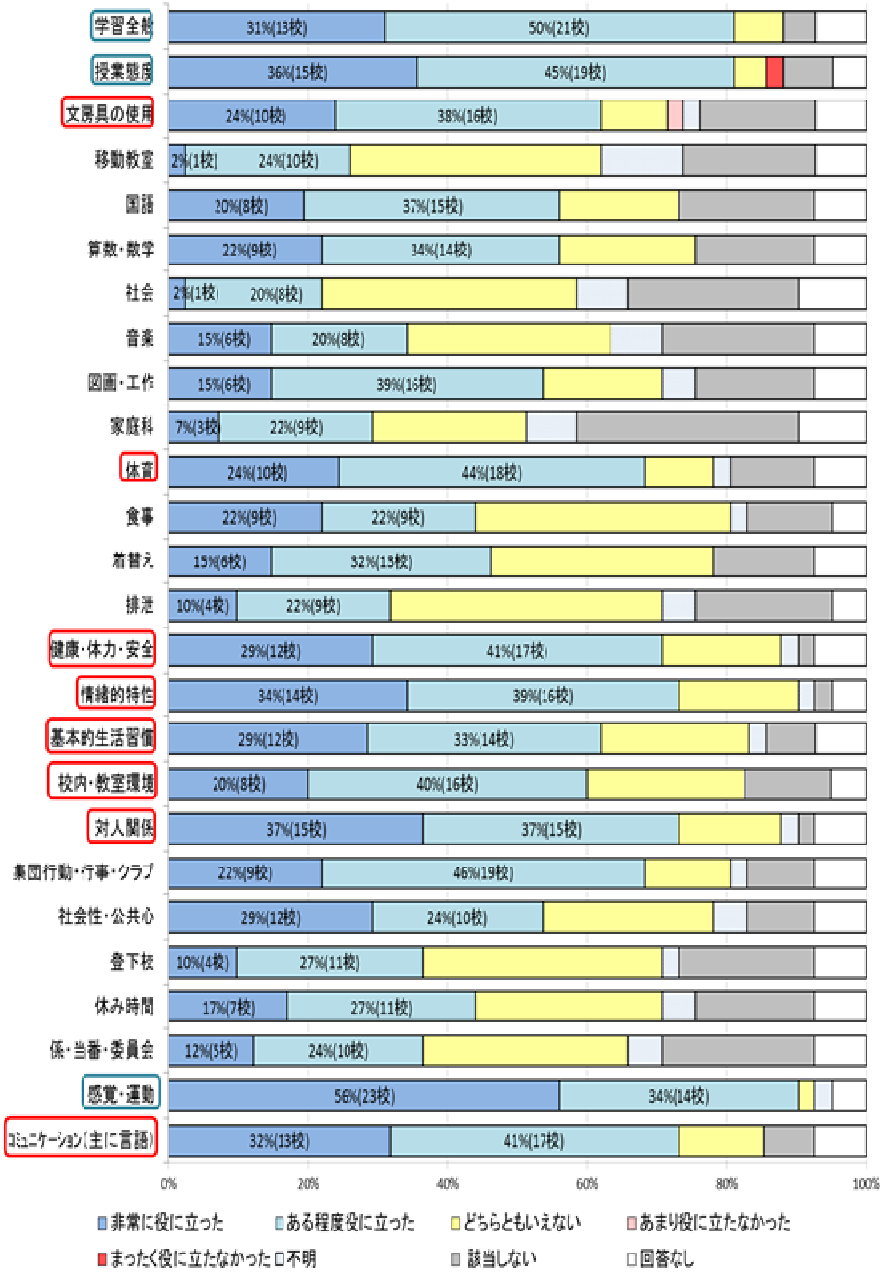
訪　問

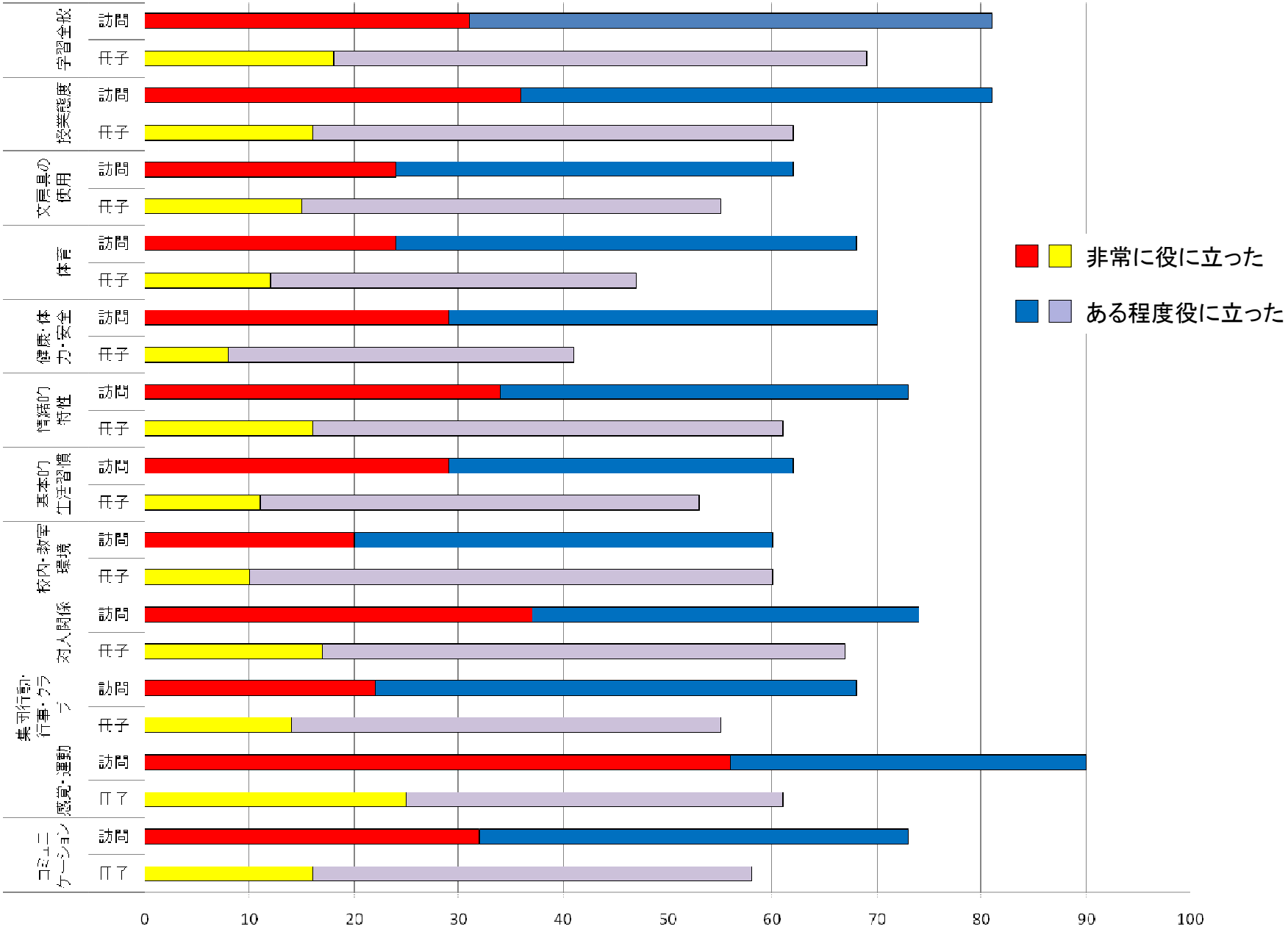


冊子が役立った項目



訪問が役立った項目

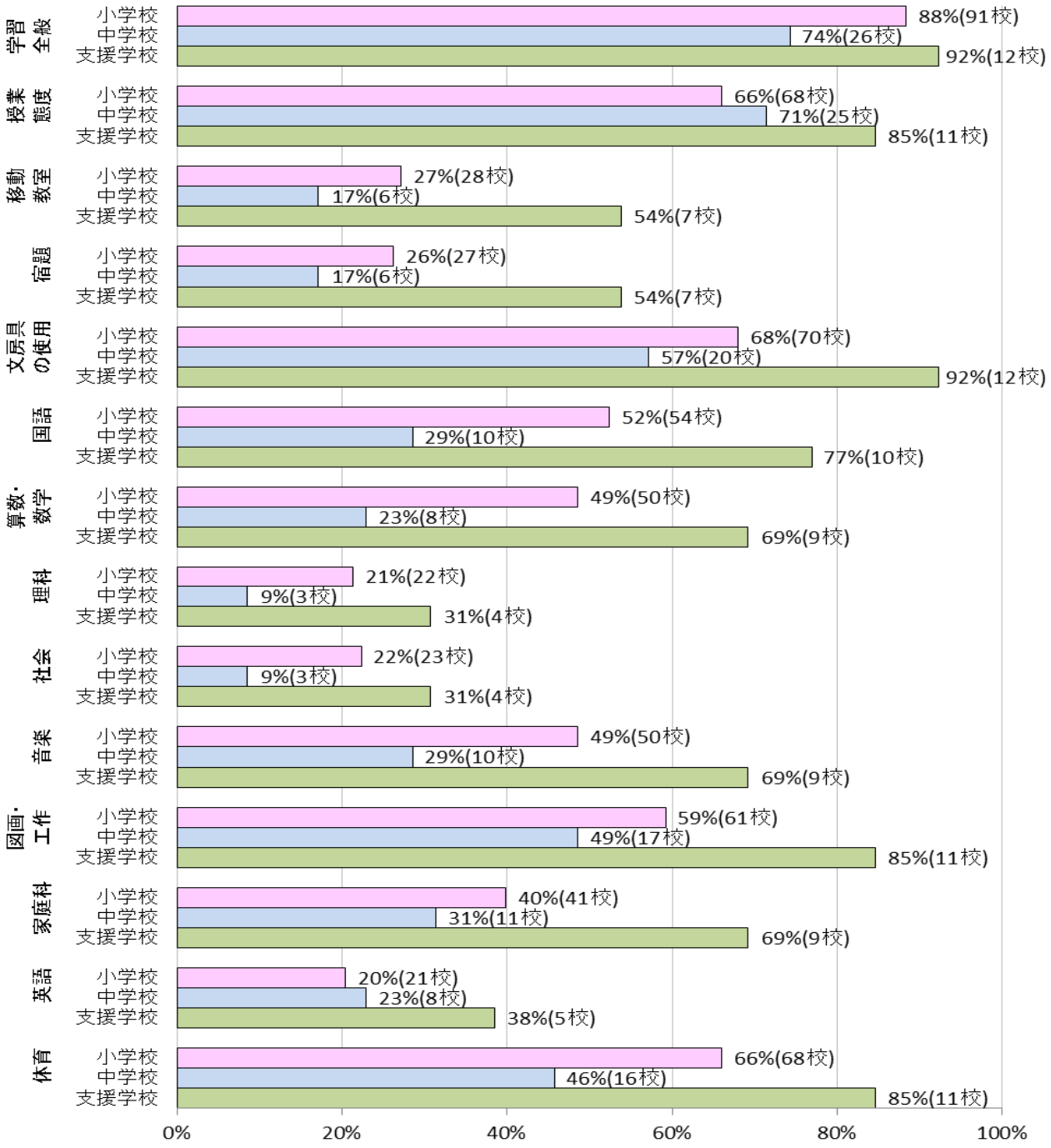



学習全般
授業態度
文具具の使用
体育
健康・体力・安全
情緒的特性
基本的生活習慣
校内・教室環境
対人関係
集団行動・行事・クラブ
感覚・運動
コミュニケーション
訪問
母子
非常に役に立った
ある程度役に立った
0
10
20
30
40
50
60
70
80
90
100

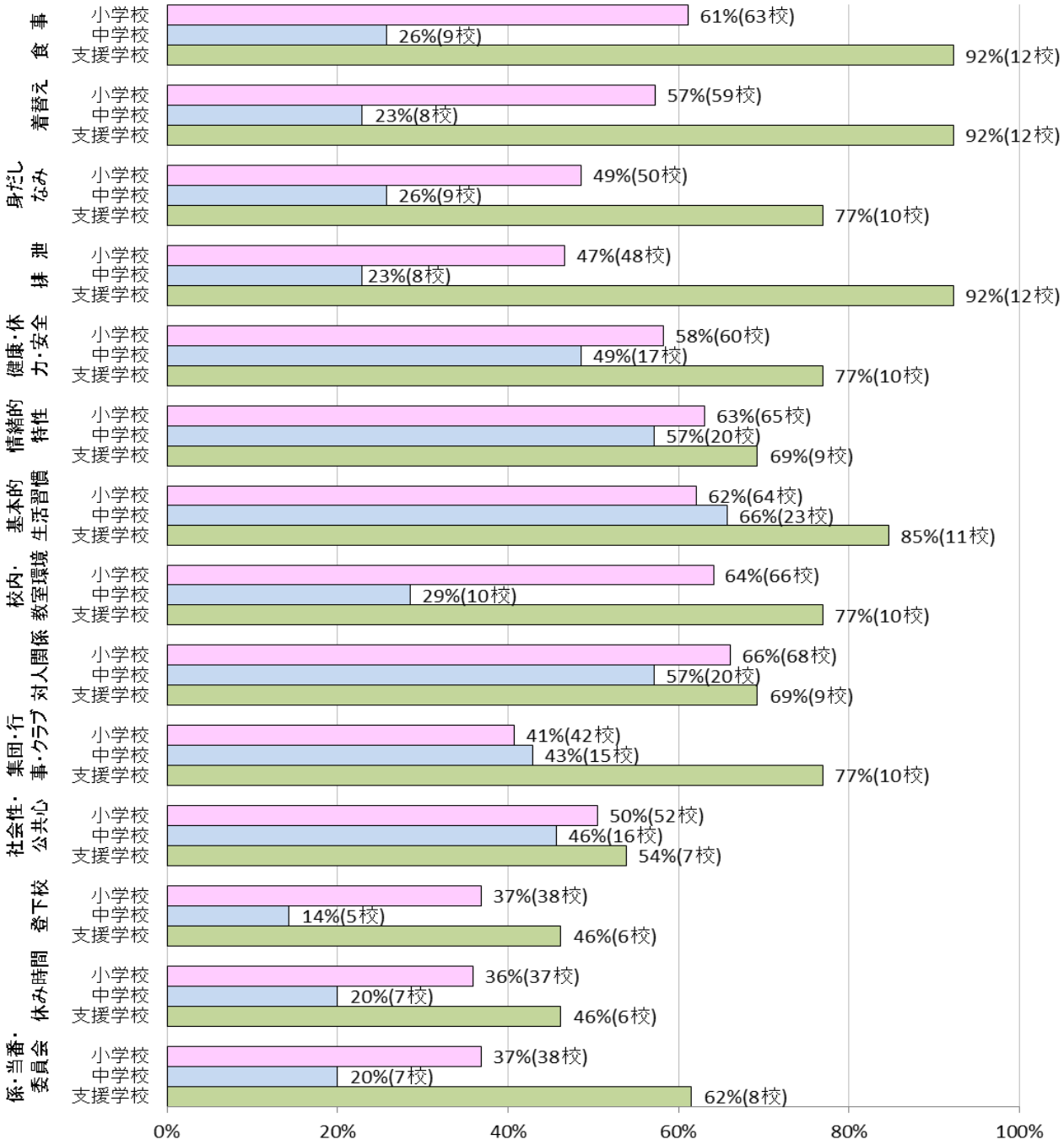
インタビューから（訪問依頼した経緯は？）

- 1つずつ行動の要因を教えてもらえて良かった。初めて知ることばかりで目から鱗だった。（脳の働き、連合運動について、表情の少なさは筋肉を動かすことの難しさが原因であったこと、不器用さの原因、運動スピードのコントロール、協調性、感覚過敏、学習について）そして、子どもたちを、この様な細かな視点で見ていかなければいけないのだと思うようになった。
- 担任が活動にどのような要素が含まれるか考えて取り入れるようになった。
- 関わった後の時間に具体的な説明やアドバイスをもらえるのでわかりやすい。何のためにこの関わりをしたのかという裏付けをしてもらうと、他の子どもにも活かせる。関わり方の工夫やポイントをアドバイスしてもらえる。」
- 授業中に落ち着いて椅子に座ることが出来ない児が、環境設定（エアクッション等）のアドバイスをもらって、落ち着いて授業を受けるようになった。」
- OTとしての脳機能の視点で子供をみてもらうことである。専門家の立場の意見やアドバイスをもらうと指導者も自信をもって指導することが出来る。OTから、今までやっていたことに裏付けをされると今後の指導のプラスにもなり、自信にも繋がる。

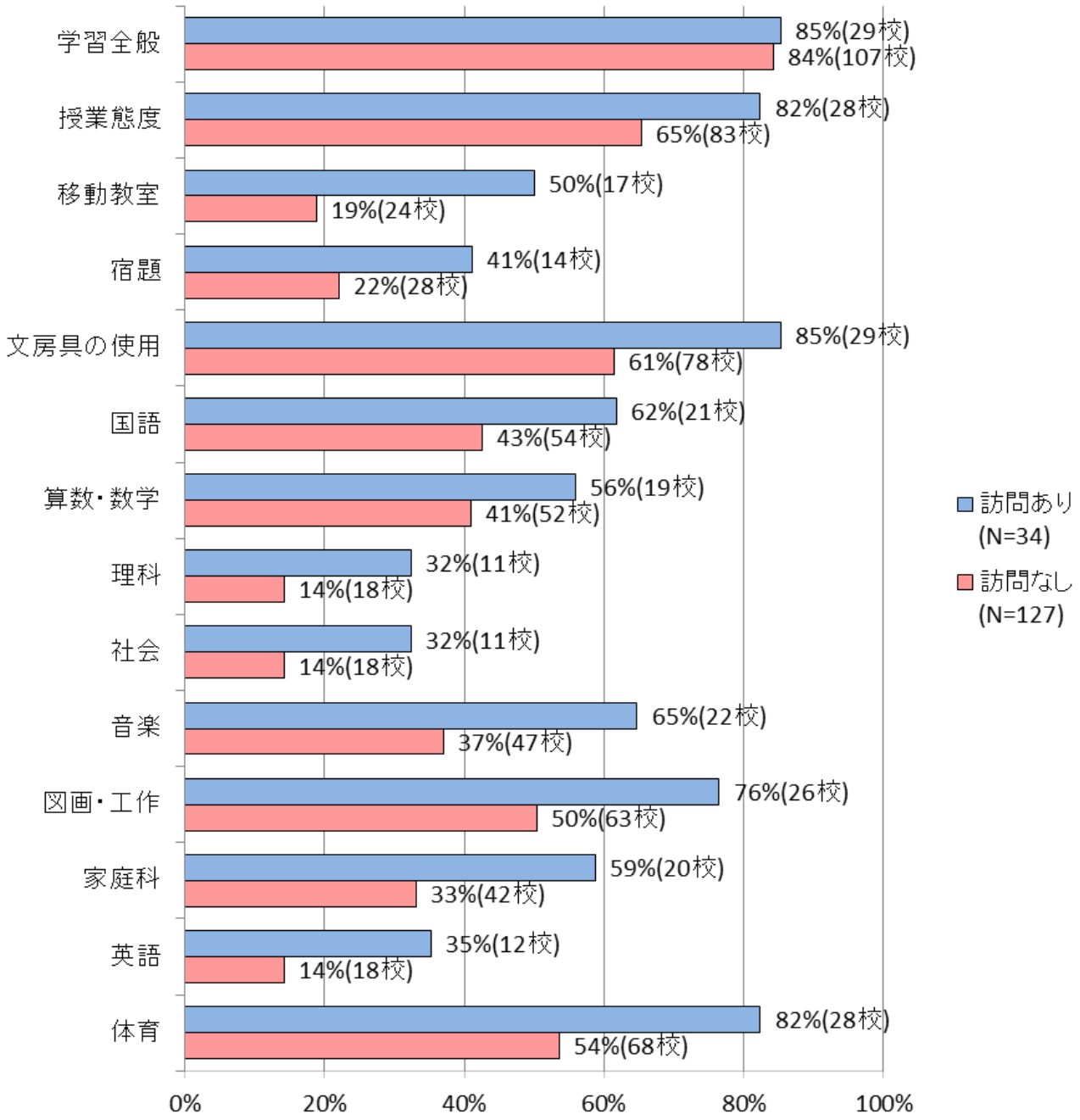
教員からみた作業療法ができること（学習）



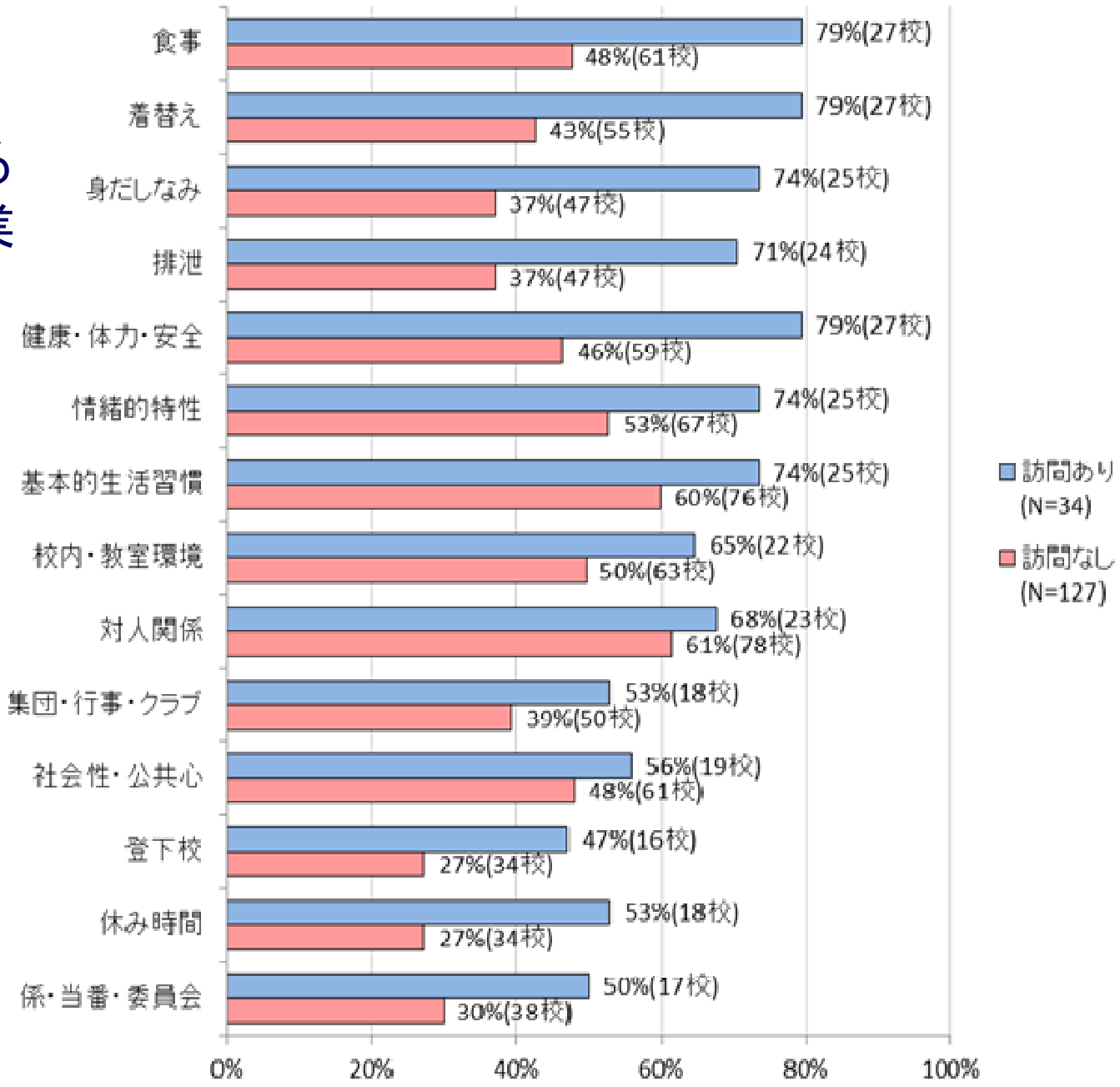
教員からみた作業療法ができること（生活）



訪問の有無による教員からみた作業療法ができること（学習）



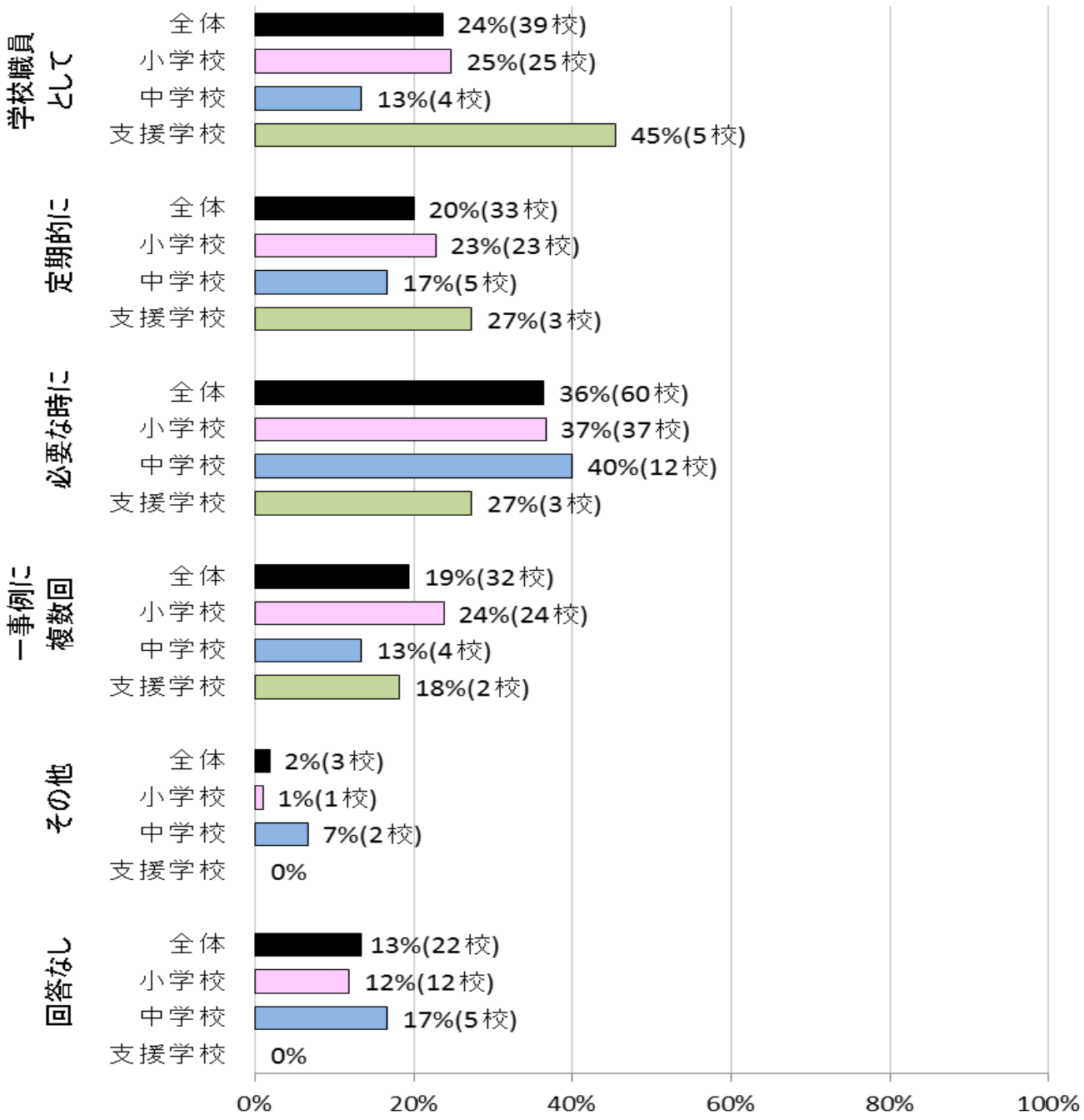
訪問の有無による教員からみた作業療法ができること（生活）

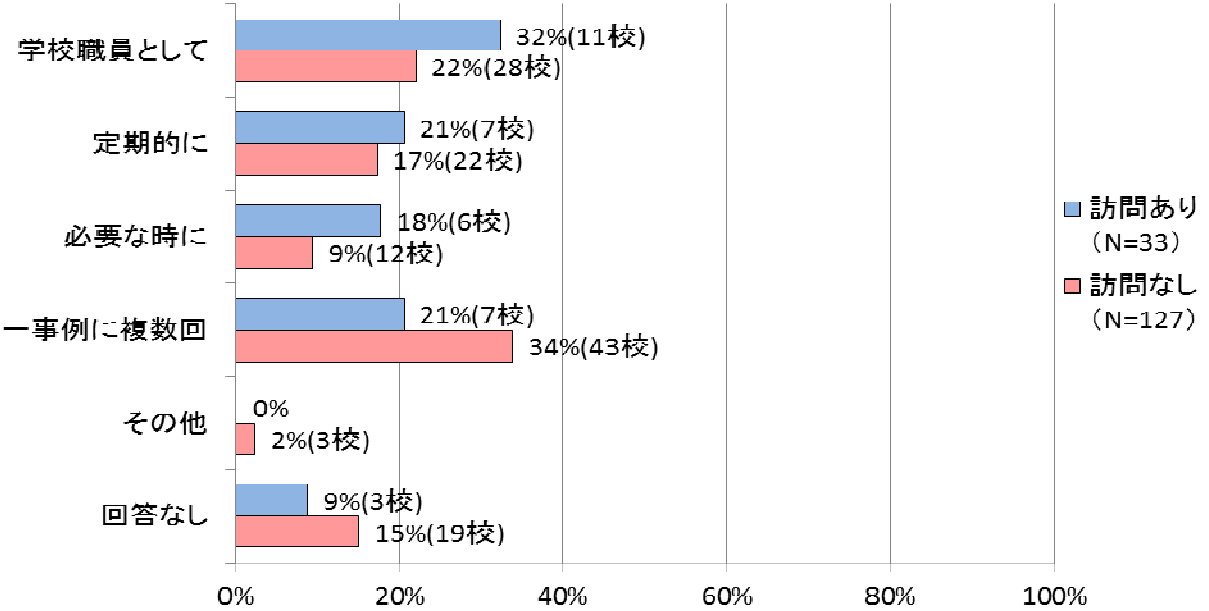


インタビューから（OTの何が有用であったか？）

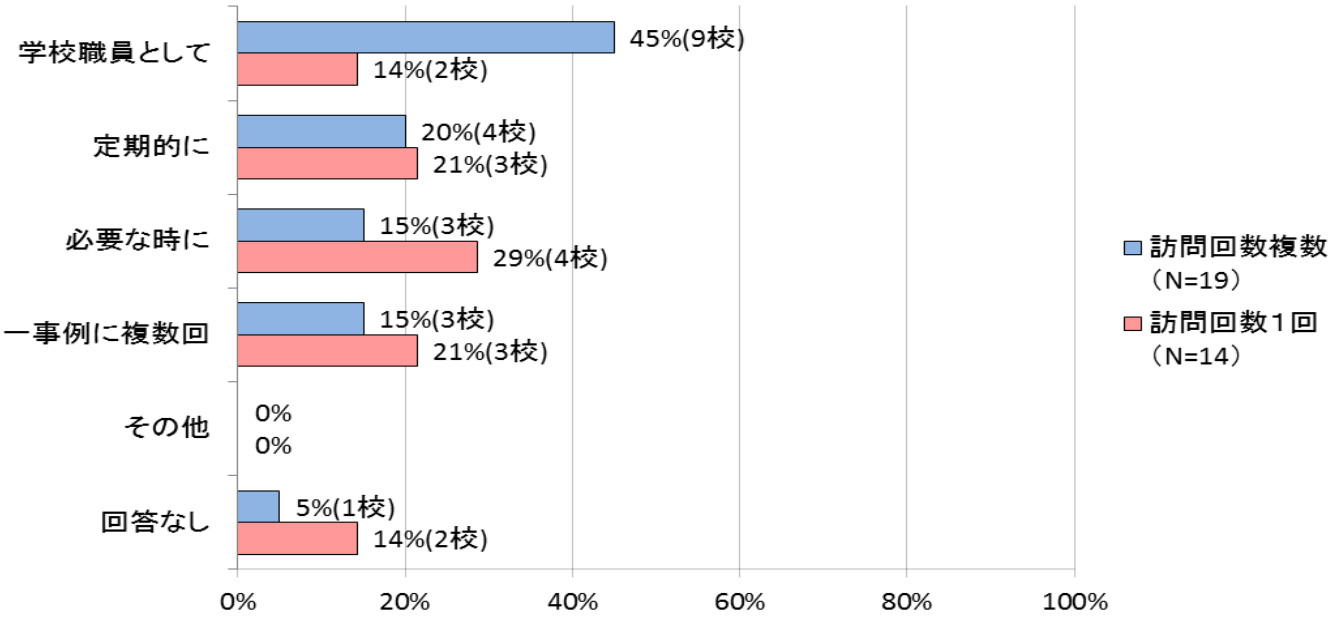
- 1つずつ行動の要因を教えてもらえて良かった。初めて知ることばかりで目から鱗だった。（脳の働き、連合運動について、表情の少なさは筋肉を動かすことの難しさが原因であったこと、不器用さの原因、運動スピードのコントロール、協調性、感覚過敏、学習について）そして、子どもたちを、この様な細かな視点で見ていかなければいけないのだと思うようになった。
- 担任が活動にどのような要素が含まれるか考えて取り入れるようになった。
- 具体的な説明やアドバイスをもらえるのでわかりやすい。何のためにこの関わりをしたのかという裏付けをしてもらうと、他の子どもにも活かせる。関わり方の工夫やポイントをアドバイスしてもらえる。
- 授業中に落ち着いて椅子に座ることが出来ない児が、環境設定（エアクッション等）のアドバイスをもらって、落ち着いて授業を受けるようになった。
- 最初のイメージは敷居が高いイメージだった。OTはSTよりわかりにくいと思っていた。中途障害の人を対象としていると思っていた。関わる中で"なんでもあり"な職種だと思った。なじみやすさがあり、壁が無いと感じた。環境設定や『身体を使ってどうするか？』、『～するために、どうすればいいか』、『できる能力は？』などをOTは評価できると思う

学校訪問の形態について





訪問回数が複数になればOTの必要性↑



インタビューから（今後のOTとの連携）

- 府の巡回相談チームやSSCは来てもらうまでの手続きが大変なので、より身近にOTがいてほしい。教育委員会、支援センターや健康推進課にOTがいて、困ったときにすぐに来てもらえると助かる。
- 手続きとか申請とかをするのが大変なのかと思っている方が多いのでは？と思う。敷居が高いと思っていた。もっと（学校側が）連携して巡回やらしてもらったらいいのに。もっともっと他校も活用されたらいいのでは？と思う。
- 直接、授業を見て評価・アドバイスがほしい。
- 学校に常時いてもらえるのが理想。また、教師だけでなく、生徒自身も中学生の年齢となると新たな介入を嫌がったりすることもあるため、より幼年期や小学校時代から介入して行ってもらえるとありがたい。
- 広報活動をもっとしていってほしい。そして先生方へOTの認知度を上げていくことでより訪問にも来ていただきやすくなるのではないか。
- 教育現場にいて欲しいという気持ちは、実際にOTと関わるほど分かった。
- OTの先生の得意分野があるだろうが、それが良く分からない。OTがまだ全体に知られていない。知っている人は知っているが、まだ一般化していないのが現状。

- アンケート結果から、小学校、支援学校ではOTがどのような職種、何を支援できるのかが理解されはじめている。
- 講演会、冊子作成などの取り組みはOTを知ってもらう最初のきっかけとしては有効であったと考える。
- しかし、学校との連携を構築する上でもっとも有効な方法は、「学校にOTが行き、作業療法を学校教育の場で実践する」ことである。
- 京都府内において学校間や地域による差はあるものの、OTという他職種を受け入れてくれる学校は確実に増えている。
- 教育委員会や学校の予算の中での訪問や、特別支援学校やSSCでの時間雇用、非常勤雇用等、目に見える成果も増えている。
- しかし、常勤職への道は未だ開けておらず、大学院生等の常勤の職をもたないOTにより支えられているのが現状である。
- 非常勤としての雇用が増えることは、OTを知ってもらう意味では重要であるが、このような状況を継続することには無理があり、国家資格をもつ専門職としても大きな問題であると考える。
- 特別支援学校で実習助手により勤務しているOTも全国的には増えてはいるが、収入、立場においても他の教員と比較し差がある。学校との連携が急速に深まっている現在、今後の雇用のあり方を日本作業療法士協会が中心となり国に対して早急に訴えていく必要がある